

『色街に艶の夜』

著:加納 邑

ill:香林セージ

ここは地獄だ。

隣室から薄い壁越しに漏れ聞こえてくる、あられもない男の喘(あえ)ぎ声。寝台が激しく軋(きし)む音。

男娼館の二階に並ぶ、娼妓たちが客の相手をする部屋の一室。こぢんまりとしたその薄暗い部屋の中には、甘ったるく淫(いん)靡(び)な香の匂いが充満していて、息が詰まりそうになる。

おぞましいすべてのものに、寝台の上に座った多(た)綺(き)は眉をきつく寄せて耐えていた。

娼妓用の衣装の長い裾(すそ)の先に、脚を横に崩して座っている自分の膝から下が見える。白くて細い足首。肩に垂れ落ちる、濡れているかのように艶(つや)のある漆黒の髪。十七歳の男としてはほっそりとした身体つきの多綺は、髪飾りをいくつもつけ、踝(くるぶし)近くまである娼妓用の華やかな衣装を身にまとっていても、なんら違和感がない。むしろ人形のように美しく見える。先ほど念入りに施された化粧で、黒い瞳の大きさと赤い紅を引いた唇の上品さが強調され、女よりもよほど妖(あや)しい色気を全身から醸し出していた。

(まさか、こんなところで身体を売ることになるなんて……)

唇を噛み、足元の敷布を睨(にら)むように見つめていると、寝台のそばに立った男に命じられた。

「顔を上げろ」

多綺は言われたとおりに、ゆっくりと顔を上げる。

生(き)成(なり)色(いろ)の上下に分かれた着物を、すらりとした長身にまとった男。焦茶色の左分けにした髪の下から同じ色の目を覗(のぞ)かせている彼は、二十代後半くらいの年齢に見える。この男娼館『花(か)牙(が)』に二人いる主人のうちの一人、青(あお)馬(ま)だ。

「悪くない」

多綺の細い顎(あご)先(さき)をつかみ、冷たい眼差しで見下ろしてくる。

「お前はもともと顔立ちが整っているせいかな、化粧映えがするな。肌も雪のように白くて、白い兎(うさぎ)みたいな可愛らしさもある」

青馬は冷静な低い声で、商品を検分するかのように言った。

「それに、元貴族っていう、他の誰にもない強い『売り』がある。お前は間違いなく、この店で売れっ子になれるだろう」

なにより、長年この色街で何人もの娼妓を見てきた自分と牙(が)月(げつ)が太鼓判を押した。だから見込み違いはない、と彼はきっぱり言い切る。

「あとは、閨(ねや)の中での性技(じょうぎ)ってやつを身につければいいだけだが……お前、女を抱いたことはあるのか？」

「……っ」

いきなりの問いに、多綺は息を呑んだ。視線を揺らし、まだなにも返事をしないうちに、青馬はその反応だけですべてを理解したというように勝手に頷(うなず)く。「ないのか。そうだろうな、なにしろ貴族の箱入り息子だったんだ。恋仲の相手は？」「……」

「恋仲の相手もなしか？ まあ、ここでは、そんなものはいないほうがいいがな……」

青馬はつかんでいた多綺の顎を、そっと放した。だが、その冷徹さを滲(にじ)ませた焦茶色の双(そう)眸(ぼう)は、多綺の顔を見つめたままだ。

「閨のことは安心していろ、お前がなに一つ知らなくても俺がこれから教えてやる」

多綺はさりげなく彼から目を逸(そ)らし、鏡台と寝台、そして二人掛けの卓台のある小さな部屋の中を睨むように見回した。

(オレは……オレはこれから本当に、ここで娼妓の仕事をしていくんだ……)

先ほど、木製の踏み板の張られた階段を上がってきたところ、緑に溢(あふ)れた中庭を四角く囲むようにして、同じような引き戸の部屋が三十ほども並んでいた。

州(しゅう)国(こく)の都から、南へ歩いて半刻もかからないところにあるこの色街。

娼妓を置いて色を売る店が数十軒、そしてそこで働く者たちの住居や彼らを相手にした飲食店などが同じくらいの数集まっているその街は、貧しく乾いた平地にあって、大門と高い塀で周りから隔絶されている。その色街に一つだけある男娼館『花牙』は、豊かな大国として名高い遠い東国の、貴族の屋敷を真似て造られている。格子窓が印象的な三階建てで、色街にある他の娼館と比べても特に高級感のある外観ではあるが、一階には通りに面した顔見せ部屋があり、いかにも娼館らしい風情を漂わせている。

普通だったら……父が二年前、外交官として赴任していた隣国で行方不明になっていなかったら。おそらく、貴族として都に暮らしていた多綺には、一生縁のなかった場所だ。

しかし、多綺は昨日ここにやってきた。いや、連れてこられた。

卑しいと蔑(さげす)まれていた色街に来たのも、実際に色を売っている女性の娼妓たちを目にしたのも、昨日が生まれて初めてだった。もちろん、男娼などというものを見たのも。

化粧をし、美しい柄の入った絹の衣装を身につけた男の娼妓たち。

都にいたとき、その存在を話に聞いたことはあった。

多綺が想像していたよりも、若い彼らの容貌はずっときれいではあったが、男が性的に男の相手をするなんて信じられなかった。ときには女性の相手もするらしいが、まず男が色を売るといふ職業が存在しているところからして、多綺には受け入れ難いことだった。

幼い頃から真面目に勉学に励み、将来は父の跡を継いで宮廷の役人になるはずだった自分。

それが、今まさに、客を取って生きている男娼たちと同じところへ墮(お)ちようとしていと思うと、情けなさや悔しさがまた胸の中に渦巻いてきた。

部屋の中を見回していた多綺が、目の前に立つ青馬へ視線を戻すと、彼はこれからの多綺の仕込みのことについて説明した。

「お前の仕込みには、これから半月ほどかける。身体を……受け入れる場所を少しずつ、男との性交に慣らしていく。性技も、他の娼妓よりゆっくり時間をかけて教え込む」

普通の娼妓の場合、行儀作法や身のこなしといったものの教育に一ヶ月ほどかける。娼妓として売られてくるのは、容姿はよいが金もなく教育を受けられなかった貧しい家の者が多い。読み書きができない者もいるため、簡単な文(ふみ)が書けるようにするだけでもそのくらいの時間がかかるとのことだった。閨の中で客相手にすることについては、ほんの三日ほどで仕込みを終えるという。

多綺はこれまで貴族の子息として暮らしてきた。十分な教育や行儀作法が身についている。それらを一から教える必要はなく、色街ならではのしきたりを教えればいいだけだ。その分、逆に閨の中での性技といったものを、半月ほどかけて十分に仕込むとのことだった。

じっくりと時間をかけて仕込んだうえで上客の相手をさせるのだと、青馬は言う。「お前はこの店では『特別』ってことだ。なにしろ、借金の額も半端じゃない」

寝台の脇に立つ青馬は、静かな眼差しで多綺の顔を見つめていた。「この俺が仕込むんだ、半月後には、どんな男でもお前に溺れる、極上品の身体に仕立て上げてやる。男の悦ばせ方っていうのをたっぷり教え込んで……お前には、期待どおりの、大金を稼げる売れっ子になってもらう。いいな？」  
「……」

返事はしなかったけれど、もともと多綺に答えの選択の余地はない。

ここに娼妓として売られたのだから。この男娼館への借金を返すために、いくら嫌だと思っても、男の客を取って金を稼ぐしかないのだ。

本文 p10～15 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>